単一言語内パラメター変異と統語変化

英語の場所句倒置の発達から

島根大学　縄田 裕幸
nawata@edu.shimane-u.ac.jp

言語変化・変異研究ユニット第11回ワークショップ／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2023年度第3回研究会

＊本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C）：課題番号21K00584）による成果の一部です。

1

第1節

はじめに

2

2

生成統語論における古典的パラメター観

- Chomsky (1981)において「パラメターを組み込んだUG」のモデルが提示された。
- そこで示されたパラメターは以下のような特徴をもつと想定された。
  - binaryな値があらかじめ原理に埋め込まれている（例：主要部先行／主要部後続）。
  - 子供は一次言語資料に基づいてどちらかの値を選択する（スイッチの比喩）。
  - 単独のパラメターの設定が広範な帰結をもたらす（クラスター効果）。
- 言語変異をパラメター値の違いとして捉えることで比較統語論研究がさかんになるとともに、通時的変化も理論言語学の射程に入ってきた。

3

3

極小主義以降のパラメター理論の進展

- **記述力の強化**：言語間の微細な変化を捉えるための（クラスター効果を伴わない）microparameterやnanoparameterの提案 (Kayne (2000) など）
- **パラメター観の変容**：パラメターは「あらかじめ値の決められたスイッチ」ではなく「UGの不完全指定」である（Boeckx (2011) など）

→ これらの提案により、言語間のパラメター変異だけでなく単一言語内のパラメター変異も議論の俎上に載せることが可能になった。

4

4

単一言語内パラメター変異

単一言語内パラメター変異：

ある言語の異なる統語環境において異なるパラメター値が設定されているように見える現象

例：
- 非調和語順 (disharmonic word order)
- 部分的主語脱落 (partial pro drop)
- 残余的動詞第二位 (residual verb second)

5

5

英語における単一言語内パラメター変異

- **古英語の部分的主語脱落現象**：主節の三人称主語が随意的に脱落した (Nawata (2014)など)。
- **古英語・中英語の非調和語順現象**：古英語ではVO語順とOV語順が混在し、中英語では目的語が数量詞や否定表現の場合にOV語順が観察された (田中 (2015)など)。
- **現代英語の残余的動詞第二位現象**：場所句倒置構文において語彙動詞が主語を超えて前置される（本発表）。

6

6

場所句倒置構文 (Locative Inversion Construction:LIC)

(1) a. On the bench sat an old lady.
b. Into the room came John.

(中島 (編) (2001: 94))

主な先行研究：

Bresnan (1994), Levin and Rappaport Hovav (1995), 中島 (1996), Collins (1997), Nishihara (1999), Culicover and Levine (2001), Postal (2004), Rizzi and Shlonsky (2006), 久野・高見 (2007), Wu (2008), Breuning (2010), Mikami (2010), Koike (2013)

7

7

本発表の構成

- 第2節：
  現代英語の場所句倒置構文についての新たな構造分析を提案
- 第3節：
  コーパス調査に基づいて場所句倒置構文の通時的発達を分析
- 第4節：
  単一言語内パラメター変異の発生要因を探り、理論的な示唆を提示

8

8

第2節

現代英語の場所句倒置構文

9

9

場所句倒置構文に現れる動詞

(2) a. be動詞
On the dining table **is** a vase of glass with roses.

b. 非対格動詞（存在）
Once upon a time in a faraway land **lived** a contented prince.

c. 非対格動詞（出現）
From the mansion **appeared** an old man with a stick.

(久野・高見 (2007: 272–273))

10

10

場所句倒置構文に現れる動詞

(3) a. 非能格動詞
*At the supermarket on Main St. **shop** local residents.
(Levin and Rappaport Hovav (1995: 222))

b. 非能格動詞
In the ballrom **danced** a dozen Scottish boys and girls. (久野・高見 (2007: 275))

非能格動詞は、一定の機能的制約を満たす場合に出現可能（久野・高見 (2007)）。統語的には主語が重名詞句転移を受けていると分析される (Culicover and Levine (2001), Koike (2013))。

11

11

場所句倒置構文に課される機能的制約

(4)
場所句倒置構文は、設定された場面に聞き手（読み手）の注意、注目を引く主語指示物が存在している／していた、あるいは、設定された場面へ／からその主語指示物が出現・消滅している／していたという、観察者／話し手の観察を表す文として解釈される場合に適格となる。

(久野・高見 (2007: 309))

12

12

場所句倒置構文における助動詞制限

(5) a. * Down the hill **may roll** the baby carriage.
b. * Down the stairs **has fallen** the baby.
c. ??Out of the house **was strolling** my mother's best friend.
d. ??On that table **has been put** a valuable book.
e. * Into the room **may have been** walking John.
(Wu (2008: 35); 強調は発表者)

受動のbeを除き、場所句倒置構文に助動詞が現れると容認度が著しく低下する。

13

13

場所句倒置構文における助動詞制限

(6) a. * In the garden **doesn't stand** a fountain. [否定]
b. * From this observation **DID emerge** a new understanding of natural language! [強調]
c. Into the room stepped a purple dragon.
* Out of it **did** too. [動詞句削除]
d. * From this observation **did**, and from that one may have, emerged a new understanding of natural language. [動詞句転移]
(Breuning (2010, 45, 61, 63); 強調は発表者)

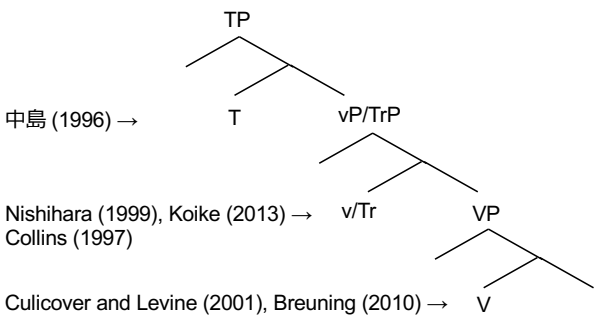
Do支持が適用される環境では場所句倒置構文が非文となる。

14

14

先行分析における定形動詞の位置

(7)



15

15

LICにおける前置詞句の主語特性

(8) a. 繰り上げで用いられる
On the wall seemed *t* to be standing two large blackbirds.
(Postal (2004: 18))

b. that痕跡効果を示す
Into the room Terry claims (*that) *t* walked a bunch of gorillas. (Culicover and Levine (2001: 285))

c. 弱交差効果を示さない
In every dog$_i$'s cage hung its$_i$ collar.
(Culicover and Levine (2001: 290))

16

16

LICにおける前置詞句の非主語（話題）特性

(9) a. 一致を引き起こさない

From that great conflict and from our incompatible viewpoints {has/*have} emerged a new, exciting idea for progress. (Breuning (2010: 44))

b. ECM補部に生起しない

* I expected [on this wall to be hung a portrait of Leonard Pabbs]. (Bresnan (1994: 108))

c. PROのコントローラーとならない

* Near Jane and Clarissa stood the two men after PRO dawdling the two teenagers.

(Breuning (2010: 49))

17

17

LICにおける前置詞句の非主語（話題）特性

(10) a. 照応形を束縛しない

*To Sally and Louise were described Mike and themselves/each other. (Postal (2004: 27))

b. 束縛の再構築効果を示す

? To himself$_i$ is said to have been unexpectedly described the only guy$_i$ who thought he was handsome.

(Breuning (2010: 50))

18

18

先行分析における場所句の位置

- (8)から(10)にみられるように、LICにおける文頭の場所句は主語の特性と話題の特性をあわせもつ。

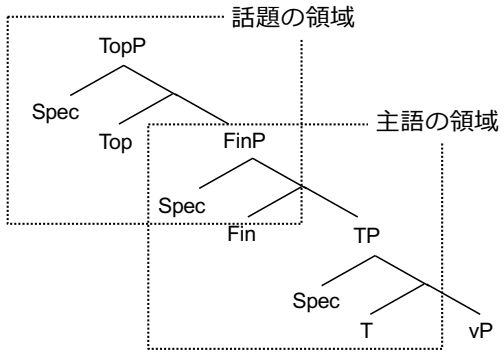
- Nishihara (1999), Wu (2008): TP指定部を経由してTopP指定部に移動:
- Mikami (2010): VP指定部（元位置）で主語解釈+TopP指定部（移動先）で話題解釈
- Koike (2013): TopP指定部とTP指定部に平行移動
- Breuning (2010): IP付加部に場所句+IP指定部にpro
- Rizzi and Shlonsky (2006): FinP指定部を経由してTopP指定部に移動

19

19

主語位置かつ話題位置としてのFinP指定部

(11)

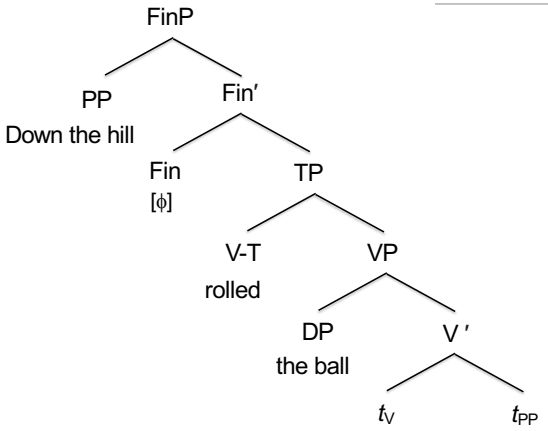


20

20

場所句倒置構文の構造

(12)



21

21

場所句倒置構文の諸特性の分析

- **ECM補部に生起しない**(=(9b))
  一般に仮定されているようにECM補部がTPだとすると、場所句の移動先がないので不可。
- **繰り上げで用いられる** (=(8a))
  場所句は不定詞節のTP指定部を経由して（せずに）主節のFinP指定部に移動できる。
- **一致を引き起こさない** (=(9a))
  倒置される場所句はそもそも一致素性をもっていない。
- **that痕跡効果を示す** (=(8b))
  FinP指定部の痕跡は主語痕跡と同様の認可を必要とする (Rizzi and Shlonsky (2006))。

22

22

場所句倒置構文の諸特性の分析

- **PROのコントローラーとならない** (=(9c))
  主題項がTP指定部に不可視移動し、そこからPROをコントロールする (Mikami (2010))。
- **弱交差効果と照応形束縛** (=(8c), (10a, b))
  これらの解釈や判断は話者によって揺らぎが見られる (cf. Postal (2004))。発表者がたずねたインフォーマントは次のような判断を示した。
  - (10a)の照応形束縛のうちthemselvesは容認可能
  - (10b)は再構築効果の読みがなく非文

  FinP指定部のA/Aバー特性の強さが個別話者によって異なる可能性あり。

23

23

単一言語内パラメター変異としての場所句倒置構文

- 語彙動詞がTまで上昇している。
- 拡大投射原理(EPP)がFinP指定部において満たされている。

語彙動詞が動詞句内に留まり、EPPがTP指定部で満たされる現代英語において特異な特性を示す。

→ **単一言語内パラメター変異**

24

24

第3節

場所句倒置構文の通時的発達

25

25

調査概要

- 使用コーパス：
  - **中英語**：The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, second edition (PPCME2) （総語数約116万語）
  - **初期近代英語**：The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME) （総語数約174万語）
- 調査対象：
  - 前置詞句および場所副詞を文頭要素とする動詞第二位語順 (V2) 構文
  - ただし、定形動詞としてbeと発話動詞sayを含む文は除く
  - 検出されたV2文に含まれる動詞を非対格動詞・非能格動詞・他動詞に分類

26

26

表1 | PP／場所副詞先頭V2構文と動詞のトークン数

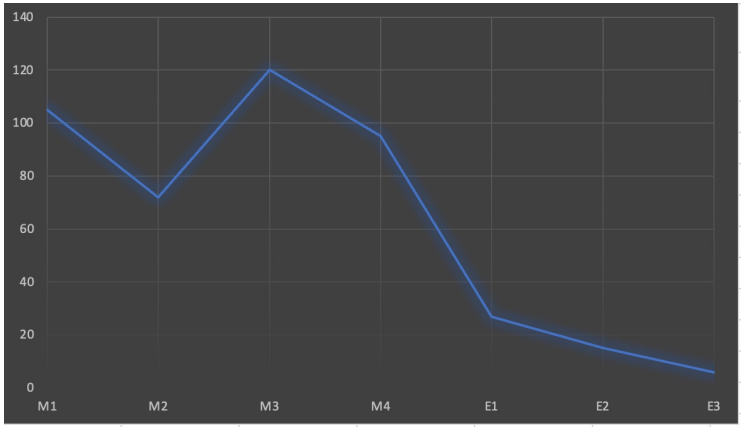
	M1 1150-1250	M2 1250-1350	M3 1350-1420	M4 1420-1500	E 1500-1569	E2 1570-1639	E3 1640-1720
非対格	115	35	244	282	123	76	22
非能格	75	12	130	52	14	2	9
他動詞	80	21	108	48	18	16	1
計	270	68	482	382	155	94	32

（PPCME2, PPCEMEの調査に基づく）

27

27

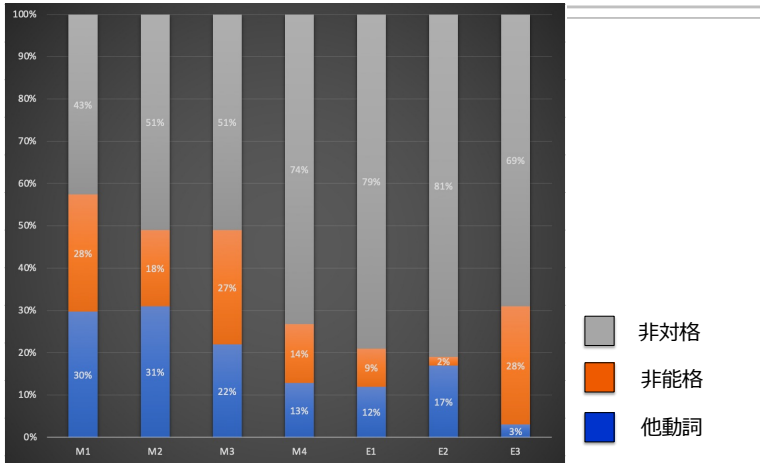
図1 | PP／場所副詞先頭V2構文の10万語あたり生起数



28

28

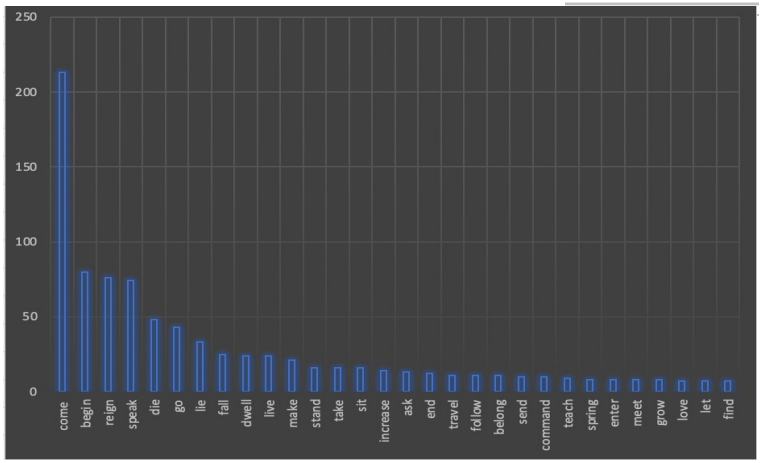
図2 | PP／場所副詞先頭V2構文に現れる動詞の割合



29

29

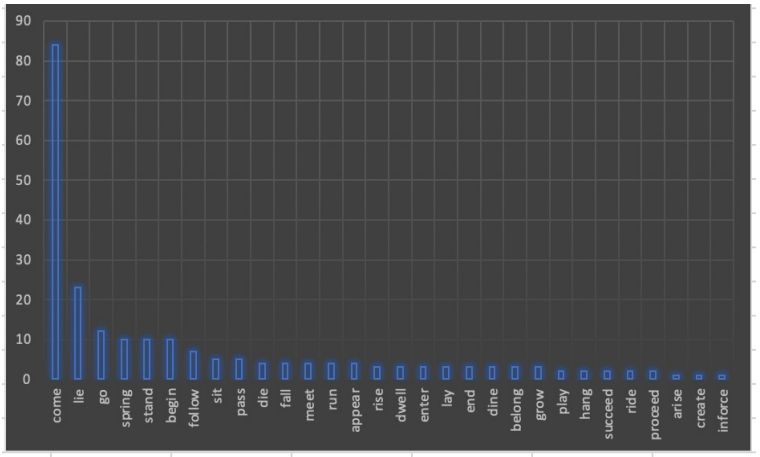
図3 | 当該V2で用いられる動詞上位30（中英語）



30

30

図4 | 当該V2で用いられる動詞上位30（初期近代英語）



31

31

調査からわかること

- M3期からM4期にかけてPP／場所副詞先頭V2構文に現れる動詞の種類に変化が見られる。具体的には、この時期に非対格動詞の割合が51%から74%に急増する。　→ **V2構文一般の衰退時期と重なる**
- E1期以降、PP／場所副詞先頭V2構文の生起数自体が急減する。
  → **V-to-T移動衰退の時期と重なる**
- 個別の動詞に関しては、中英語でも初期近代英語でもcomeが圧倒的に多い。初期近代英語になると少数の動詞による寡占化が進行する。

32

32

中英語のPP/場所副詞先頭V2構文

(13) a. 非対格動詞

And þere besyde **lay** somtyme seynt Anne his wif
and there beside lay sometime saint Anne his wife
(CMMANDEV-M3,58.1440)

b. 非能格動詞

IN þis sentence **spekis** sain benet of obedience,
in this sentence speaks saint Bebet of obedience
(CMBENRUL-M3,9.308)

c. 他動詞

And here **supposeþ** Crist þat he is trewþe,
and here supposes Christ that he is truth
(CMWYCSER-M3,410.3299)

33

33

初期近代英語のPP/場所副詞先頭V2構文

(14) a. 非対格

Nowe hereof **commethe** [thys notable myracle of the order of destinie], (BOETHCO-E1-H,109.852)

b. 非能格

Here **dined** with me also [Mrs. Batters, poor woman, now left a sad widow by the drowning of her husband the other day]. (PEPYS-E3-H,7,417.174)

c. 他動詞

At the gate therof **met** her [the lady marcus of Northamton, the countesse of Penbroke], (EDWARD-E1-H,359.244)

34

34

一致素性・主語・定形動詞の位置の通時的変遷

(15) a. Stage 1: 古英語ー後期中英語 (V2の時代)

$[_{TopP}$ Subj. $Top_{\#}$ $[_{FinP}$ Fin_{π}-Vf $[_{TP}$ Subj. t_T vP]]]

b. Stage 2: 後期中英語ー初期近代英語 (V-to-Tの時代)

$[_{TopP}$ Top $[_{FinP}$ Subj. Fin_{φ} $[_{TP}$ Subj. T-Vf vP]]]

c. Stage 3: 初期近代英語ー

$[_{TopP}$ Top $[_{FinP}$ Fin $[_{TP}$ Subj. T_{φ} $[_{vP}$ v-Vf VP]]]]

#: 数素性, π: 人称素性, φ: 数・人称素性

（縄田（近刊））

35

35

話題素性に関する提案

- Topの話題素性は随意的にFinへと継承される。

$[_{TopP}$ $Top_{[Top]}$ $[_{FinP}$ $Fin_{[Top]}$ $[_{TP}$ T vP]]]

(cf. Chomsky (2008), Miyagawa (2010))

話題素性が継承されることによりFinP指定部要素が話題として解釈される。

36

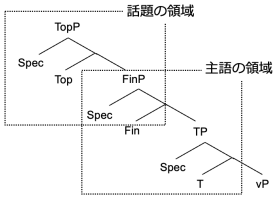
36

関連する機能範疇指定部の解釈

表２

	OE—LME	LME—EModE	EModE—
TopP指定部	話題／主語	話題	話題
FinP指定部	話題	主語／話題	話題
TP指定部	主語	主語	主語

後期中英語から初期近代英語にかけてのFinP指定部は話題と主語の特性を兼ね備えていた (cf. (11))。この構造が現代英語の場所句倒置構文に保存されている。



37

37

古英語—後期中英語の場所句倒置構文の派生

(16)

[$_{TopP}$ Loc Top [$_{FinP}$ Fin [$_{TP}$ T [$_{vP}$ Agent v [$_{VP}$ Theme V t_{Loc}]]]]]

Aバー移動

・定形動詞はTを経由してFinまで移動する (cf. (15a))。
・場所句はTopP指定部まで移動し移動先で話題かつ主語として解釈される。
・話題句の移動はAバー移動なのでAgent項とTheme項を越えて移動できる。

38

38

後期中英語以降の場所句倒置構文の派生(非対格動詞)

(17) [$_{FinP}$ Loc Fin [$_{TP}$ T [$_{VP}$ Theme V t_{Loc}]]]

A移動

[$_{TopP}$ Top$_{[Top]}$ [$_{FinP}$ Loc Fin$_{[Top]}$ [$_{TP}$ T [$_{VP}$ Theme V t_{Loc}]]]]

素性継承

・定形動詞はTまで移動する (cf. (15b))。
・場所句はFin指定部までA移動して主語として解釈される。
・場所句とTheme項はともにVP内にあるためminimality違反は生じない。
・その後TopがFinPに併合して[Top]素性がFinに継承され、場所句が話題として解釈される。

39

39

後期中英語以降の場所句倒置構文の派生(非能格動詞)

(18) [$_{FinP}$ Loc Fin [$_{TP}$ T [$_{vP}$ Agent v [$_{VP}$ V t_{Loc}]]]]

・場所句とAgentは同一投射内にないため場所句のFinP指定部へのA移動がminimality違反を引き起こす。
・Agent項に対して重名詞句転移を適用すればminimality違反が回避される。

40

40

第4節

変化の要因とパラメター理論への示唆

41

41

単一言語内パラメター変異の発生要因

Q: 後期中英語から初期近代英語にかけての場所句倒置構文は、なぜ残余的V2構文として現代英語まで残ったのか？

A: 次の2つの要因が考えられる。

- 場所句倒置構文がもつ機能的価値
- 獲得を促す刺激の存在

42

42

場所句倒置構文に課される機能的制約（再掲）

(19) (=(4))
場所句倒置構文は、設定された場面に聞き手（読み手）の注意、注目を引く主語指示物が存在している／していた、あるいは、設定された場面へ／からその主語指示物が出現・消滅している／していたという、観察者／話し手の観察を表す文として解釈される場合に適格となる。

(久野・高見 (2007: 309))

指示物の存在・出現・消滅を表すという固有の機能的価値をもっていたために、〈場所句ー動詞ー指示物〉の語順が構文化して保持された。

43

43

話題化前置の割合の変化 | 場所副詞類・前置詞句

Table 3: Rate of topicalization of locative adverbs

	oe1-2	oe3-4	me1	me2	me3	me4	eme1	eme2	eme3
# of sent. with loc. adv.	289	361	491	124	922	753	866	712	588
thereof topicalized	82	98	181	72	539	498	523	400	291
%	**28.4**	**27.1**	**36.9**	**58.1**	**58.5**	**66.1**	**60.4**	**56.2**	**49.5**

(Speyer (2008: 80))

Table 4: Rate of topicalization of prepositional phrases

	oe1-2	oe3-4	me1	me2	me3	me4	eme1	eme2	eme3
# of sent. with PPs	1448	1271	7709	4628	16518	9596	13309	15503	10494
thereof topicalized	569	335	2142	1134	6566	3399	4729	5437	3516
%	**39.3**	**26.4**	**27.8**	**24.5**	**39.8**	**35.4**	**35.5**	**35.1**	**33.5**

(Speyer (2008: 82))

44

44

古英語・中英語の奇態格主語心理動詞構文

(20) se munuc feoll to þæs halgan
the monk.NOM.SG. fell to the.GEN.SG. holy.GEN.SG.

weres fotum [and] **him** swiðe
man.GEN.SG. feet.DAT.PL. and him.DAT.SG. greatly

hreow, þæt he swa dysiglice dyde
rued.3.SG. that he so foolishly did

'the monk fell to the holy man's feet and rued sorely what he had done so foolishly'

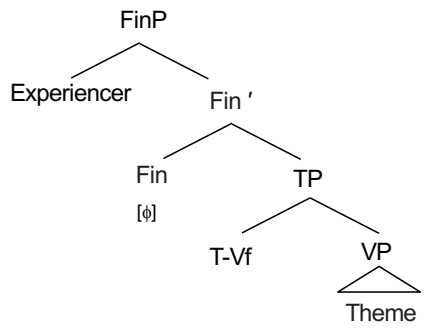
(GD 2 (C) [0383 (19.143.20)]/Möhlig-Falke (2012: 91))

45

45

後期中英語以降の奇態格主語心理動詞構文の構造

(21)



(cf. Nawata (2019))

46

46

話題化前置の割合の変化 | 目的語

Table 5: Rate of direct object topicalization

	oe1-2	oe3-4	me1	me2	me3	me4	eme1	eme2	eme3
# of sent. with DO	6184	10002	5329	3642	9608	5583	7719	10103	7057
thereof topicalized	736	1080	570	228	558	257	376	428	247
%	**11.9**	**10.8**	**10.7**	**6.3**	**5.8**	**4.6**	**4.9**	**4.2**	**3.6**

(Speyer (2008: 37))

Table 6: Rate of topicalized personal pronoun objects

	oe1-2	oe3-4	me1	me2	me3	me4	eme1	eme2	eme3
all pron. objects	200	603	285	213	454	316	107	155	96
thereof topicalized	22	40	11	2	8	0	1	0	1
%	**11.0**	**6.6**	**3.9**	**0.9**	**1.8**	**0**	**0.9**	**0**	**1.0**

(Speyer (2008: 54))

47

47

パラメターの種類

(22) For a given value v_i of a parametrically variant feature F:

a. **Macroparameters**: all heads of the relevant type share v_i;

b. **Mesoparameters**: all heads of a given naturally definable class, e.g. [+V], share v_i;

c. **Microparameters**: a small subclass of heads (e.g. modal auxiliaries, pronouns) share v_i;

d. **Nanoparameters**: one or more individual lexical items is/are specified for v_i.

(Roberts (2021: 387))

48

48

パラメター階層

(23) Does P(roperty) characterise L(anguage)?

- NO: **macroparameter**
- YES: All relevant heads?
  - YES: **macroparameter**
  - NO: A natural-class subset of heads?
    - YES: **mesoparameter**
    - NO:A further restricted natural-class subset of heads?
      - YES: **microparameter**
      - NO: Only lexically specified items? **nanoparameter**

(Biberauer (2018: 106))

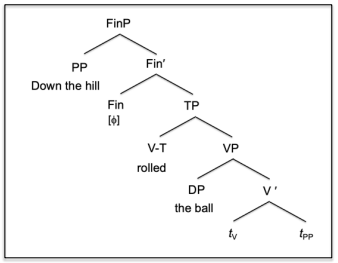
49

49

場所句倒置構文のパラメター階層における位置づけ

- Finの一致素性が場所句のA移動と動詞のV-to-T移動を引き起こす。
- この一致素性の分布は動詞が存在・出現・消失を表す非対格動詞である場合に限られる。
- (23)のパラメター階層では “A further restricted natural-class subset of heads” あるいは “only lexically specified items” に相当

→ microparameter/nanoparameter



50

50

パラメター階層を創出させる要因

(24) a. Feature Economy (FE)
Postulate as few formal features (FFs) as possible, given the primary linguistic data.

b. Input Generalization (IG)
Maximize available FFs.

“Together, FE and IG form a minimax search/optimization algorithm, with FE minimizing FFs and IG maximizing available FFs.”

(Roberts (2019: 93))

51

51

パラメター階層と言語獲得

Step 1
- ある特性Pに関する肯定的証拠がなければ、FEに基づいて素性Fを獲得しない。(NO)

Step 2
- 特性Pに関する肯定的証拠があれば、IGに基づき関連するすべての範疇にFを設定する。(ALL)

Step 3
- 言語獲得が進行するにつれ、Fを設定する範疇を絞り込んでいく。(SOME)

言語獲得はNO > ALL > SOME の順に進行する。

52

52

パラメター階層と言語変化の方向性

Table 7: Third factors in relation to direction of change in a parameter hierarchy

	Upward Change	Downward Change
Feature Economy	Favoured	Neutral
Input Generalization	Favoured	Disfavoured

(Roberts (2021: 408);一部改変)

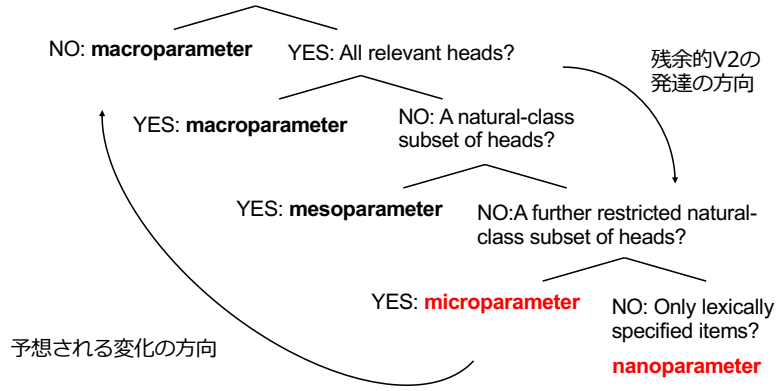
Feature EconomyとInput Generalizationの観点からは、
言語はパラメター階層を上昇する方向で変化することが予想される。

53

53

予想される変化と観察される変化

(25) Does P(roperty) characterise L(anguage)?



54

54

部分集合原理 (Subset Principle)

(26) The learning function maps the input data to that value of a parameter which generates a language: (a) compatible with the input data; and (b) smallest among the languages compatible with the input data.

(Wexler and Manzini (1987: 61), cited in Roberts (2021: 374))

Table 8

	Upward Change	Downward Change
Subset Principle	Disfavoured	Favoured

(Roberts (2021: 408);一部改変)

55

55

まとめ

- 現代英語の場所句倒置構文では、場所句がFinP指定部を占めて主語かつ話題として解釈される。
- 後期中英語から初期近代英語にかけてのV2構造が場所句倒置構文で保存され、現代英語における単一言語内パラメター変異が生じた。
- 英語場所句倒置構文の通時的保存は、言語獲得で「部分集合原理」が働いていることを示唆している。

56

56

参考文献

Biberauer, Theresa (2018) “Pro-drop and Emergent Parameter Hierarchies,” *Null Subjects in Generative Grammar: A Synchronic and Diachronic Perspective*, ed. by Federica Cognola and Jan Casalicchio, 94–135, Oxford University Press, Oxford.

Boeckx, Cedric (2011) “Approaching Parameters from Below,” *The Biolinguistic Enterprise: New Perspectives on the Evolution and Nature of the Human Language Faculty*, ed. by Anna Maria Di Sciullo and Cedric Boeckx, 205–221, Oxford University Press, Oxford.

Bresnan, Joan (1994) ”Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar,” *Language* 70, 72–131.

Breuning, Benjamin (2010) “Language-Particular Syntactic Rules and Constraints: English Locative Inversion and *Do*-Support,” *Language* 86, 43–84.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.

Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge, MA.

57

57

参考文献

Culicover, Peter W. and Robert D. Levine (2001) “Stylistic Inversion in English: A Reconsideration,” *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 283–310.

Kayne, Richard S. (2000) *Parameters and Universals*, Oxford University Press, Oxford.

Koike, Koji (2013) “Two Types of Locative Inversion Construction in English,” *English Linguistics* 30, 568–587.

久野暲・高見健一 (2007)「「場所句倒置」構文の適格性条件」『英語の構文とその意味― 生成文法と機能的構文論―』272–311, 開拓社, 東京.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax–Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.

Mikami, Suguru (2010) “The Locative Inversion Construction in English: Topicalization and the Pronunciation of the Lower Copy,” *English Linguistics* 27, 297–328.

Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.

Möhlig-Falke, Ruth (2012) *The Early English Impersonal Construction: An Analysis of Verbal and Constructional Meaning*, Oxford University Press, Oxford.

58

58

参考文献

中島平三 (1996)「多重主語構文としての場所句倒置」『英語青年』142 巻 1 号, 18–22.

中島平三 (編) (2001)『[最新]英語構文事典』大修館, 東京.

Nawata, Hiroyuki (2014) “Verbal Inflection, Feature Inheritance, and the Loss of Null Subjects in Middle Englihsh,” *Interdisciplinary Information Sciences* 20, 103–120.

Nawata, Hiroyuki (2019) “Quirky Experiencer Subject Constructions as Locative Inversion,” 『近代英語研究』35, 111–139.

縄田裕幸 (近刊)「英語の節構造の変化」（縄田裕幸・柳朋宏・田中智之『生成文法と言語変化』所収）, 開拓社, 東京.

Nishihara, Toshiaki (1999) “On Locative Inversion and *There*-Construction,” *English Linguistics* 16, 381–404.

Postal, Paul M. (2004) *Skeptical Linguistic Essays*, Oxford University Press, Oxford.

Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

59

59

参考文献

Rizzi, Luigi and Ur Shlonsky (2006) “Satisfying the Subject Criterion by a Non Subject: English Locative Inversion and Heavy NP Shift,” *Phases of Interpretation*, ed. by Mara Frascarelli, 341–362, De Gruyter, Berlin.

Roberts, Ian (2019) *Parameter Hierarchies and Universal Grammar*, Oxford University Press, Oxford.

Roberts, Ian (2021) *Diachronic Syntax*, 2nd ed., Oxford University Press, Oxford.

Speyer, Augustin (2008) *Topicalization and Clash Avoidance: On the Interaction of Prosody and Syntax in the History of English with a Few Glimpses at German*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

田中智之 (2015) 「古英語における目的語移動と左周縁部」『名古屋大学文学部研究論集（文学）』61, 71–88.

Wexler, Kenneth and Rita Manzini (1987) “Parameters and Learnability in Binding Theory,” *Parameter Setting*, ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 41–76, Reidel, Dordrecht.

Wu, Hsiao-hung Iris (2008) *Generalized Inversion and the Theory of Agree*, Doctoral dissertation, MIT.

60

60